

# 語用論から異文化間コミュニケーションへ

—語用論統合モデルに向けて—

西 光 義 弘

## 要 旨

学習者が外国語を実際の場面に用いるための基盤を構築することが肝要である。そのためには語用論および異文化間コミュニケーションの研究で明らかにされた表面的な知見の裏に潜むより深い原則としての人間の注意行動の特質を基盤とし、日本語と英語の違いを注意の配分方策の違いに求め、さまざまな現象を統一的に説明できる理論の構築を目指さなければならない。本論文はその第一歩を踏み出したものである。

キーワード：語用論 (pragmatics)、異文化間コミュニケーション (inter-cultural communication)、隣接対 (adjacency pair)、注意 (attention)、質の格率 (maxim of quality)

## I はじめに

高校英語の指導要領の改訂により、英文法が廃止され、コミュニケーション重視が打ち出されてもうかなりの年数がたつが、いまだその基盤となるべき英語によるコミュニケーションの原則などは教育現場で教えられるほど明示的なものは提示されていない。さらに近年では大学でのグローバル人材の育成が唱えられているが、その基盤となるべきグローバル人材が身に着けるべきコミュニケーション能力の体系的なものもいまだ提示されていない。このままの状態が放置されていると、時間がかかる試行錯誤による訓練に頼ることになり、能率的でないばかりでなく、結果的に適切なコミュニケーション能力に到達しない可能性が高い。そのような理論的基盤としての可能性は

言語学における語用論、コミュニケーション論における異文化間コミュニケーション論という分野があり、その一部には理論的基盤の種になるものが散見されるが、学習者の使用に耐えるものを体系的にまとめるためにはかなりの作業が必要とみられる。本稿ではその方向性を探り、大まかな形を提示することを目的とする。

## II 語用論の現状

言語学におけるコミュニケーションの研究としては語用論という分野が1960年代後半から研究されるようになり、Austin の遂行文、Grice の会話の協調原則、Brown & Levinson のポライトネス、Sperber & Wilson の関連性理論といった理論が提案されてきた。一方で社会学の分野では Sacks の創始したエスノメソドロジイ（会話分析）の手法が盛んになっていった。これらの研究は英語圏を中心に英語を対象に行われたこともあり、理論構成の過程で他の言語との異同を視野に入れていなかった。いきおい知らず知らずのうちに英語に観察される現象が言語普遍であるかのごとく理論化されていった。

語用論においては Grice の会話の協調原則と会話の格率とその中心的な枠組みとして受け入れられた。現在一定の勢力を誇る関連性理論も基本的にはグライスの枠組みを簡素化したものでその延長上にあるとあっていい。一般的に先行理論の枠組みを根本から考え直すという方向がとられず、処理できない現象についてはポライトネス理論のようにパッチワーク的に既存の理論を維持しつつ、別のコンポーネントとして付け加えるか、関連性理論のように既存の枠組みを簡素化する方法を選ぶ傾向がある。第3の道としてパッチワーク的にくっつけられない場合にはまったく異なったアプローチとしてお互い関係なく存続する場合もある。語用論と会話分析はそのような関係にあるとあってよい。

以上の様な語用論研究の現状では総合的にすべての語用論的現象を説明する統合的モデルが必要となってくる。

理論的に適正な統合モデルを案出するためには幅広く現在の語用論では考

慮の範囲に入っていない現象を幅広く探して回り、できるだけ様々な語用論的現象を取り上げる必要がある。そうすることによって現存の語用論モデルでそれぞれのアプローチが中心に据えている現象が全体としてどのような形で絡まっているかが明らかになり、統合モデルのあるべき姿が見えてくるからである。

複数の盲人が触って象の形を報告するとひとによって全く異なった印象を与えるという寓話がある。現在の様々な語用論的現象に対するアプローチはまさしくこのような状況にある。象の全体像をつかまなければならないという教訓であるが、現在の科学的な知見からすると象の表面的な形のおおもとにあるのはDNAということになる。もしかするとさまざまな語用論的現象を起こしているのはもっと根源的な原則があって表層的に多様性を見せているだけかもしれない。このような立場に立てば、現在語用論的現象として取り上げられているものをリストアップし、さらにいまだ注目されていない現象をも上げていくことによって、根源的な要因を明らかにすることができる可能性があるはずである。本論文ではそのようなりサーチ・デザインのもとに研究を進めていくこととする。

### III グライス理論の欠陥

#### 3.1. グライス理論のシステムのおかしさ

グライス理論では会話協調の原則が上位原則として存在しており、下位原則として会話の格率が存在している。上位原則である会話協調の原則が守られている限り、格率を破っても大丈夫で、その仕掛けにより会話の含意の効果が生まれるとされる。しかしこのシステムは少々おかしい。破ってもいい格率などなくても構わないのではないかという疑いがもたげてくる。そもそも守らなくてもいいものなど何故設定する必要があるのか、それではないのと同じではないのかという根本的な問題がある。一応つじつまが合ったシステムになっているようだが、説明する現象だけに対応したシステムであって、もしかすると、視野に入っていない現象をも加えてくると全く異なった全体

像が浮かび上がる可能性がある。そこでどのようなシステムを目指すかを見極めるためにグライス理論では取り扱い切れていない諸現象を取り上げよう。

### 3.2. グライス理論では説明できない現象

#### 3.2.1. 会話の協調原則

下部体系としての諸格率の上にあって根本的原則としてグライスは会話の協調原則（話し手は、会話の目的あるいは方向付けに矛盾しない形で言語伝達を行う）がある。この規定の仕方はかなり抽象的で中立的なものであり、「会話の目的あるいは方向付け」の中身が明らかにされていない。グライス以後最近になって共同注意や協力関係などの研究も盛んになり、協調原則の中身を掘り下げることが可能になったといえる。英語の会話の運び方を实际的に解説した（鶴田・ロシター・クルトン 1988）にはグライスの会話の協調原則にあたると思われる「会話の進行に積極的に貢献する」（pp. 21-）と題されたセクションがあり、会話を盛り上げる方法として質問に対して応答+会話を発展させるためのもう一言を付け加えるという具体的な方策を挙げている。このことについては後で会話分析の隣接対に関連して詳しく考察する。

#### 3.2.2. 質の格率を破ってもいい文化の存在

質の格率（うそをついてはいけない）は英語文化に基づいており、普遍的なものではない。インド、スペイン語圏、トルコ、ブラジル、イラン、エジプト、インドネシアでは通りすがりの人に道を聞かれて、知らない場合には適当にでたらめを教える。これはグライス理論の質の格率を破っている。ウソをつかないという原則よりも他人に冷たくせず、手助けの手を差し伸べるという態度を表明するという原則の方が優先されるのである。これらの文化では誇り高く、「知らない」と言いたくない。また困っている人を見ると助けの手を差し伸べたくなるということもある。質の格率よりは人助けの態度を示すという原則の方が優先されるのである。野田尚史氏によれば、学生時

代にスペインに留学していた時に道を聞くとでたらめを教えられる目に何度もあったということであるが、それはなにもだましたり、困らせようという動機から出ていなくて、直前に道を教えてもらった人が見ているところではかの人に道を聞いても全然気にしないそうである。このような文化では簡単な対処法としては複数の人に聞くことで解決できる

筆者のここ1, 2年の調査で平気で間違った道を教える文化を持つ国のうちトルコ、イラン、エジプト、インドネシアはイスラム文化圏にあり、インドはイスラム王朝が長い間国を支配していた過去を持ち、スペインもイスラムに支配されていた経験を持つ。さらに調べる必要があるが、何らかの形でイスラム的な対人関係の原則がかかっている可能性が高いと思われる。

### 3.2.3. 質の公準はどこから来るのか

日本と欧米でのうそをつかないという傾向は異なる原因による可能性がある。日本では相手の気持ちを思いやり、断るつもりなのに「善処いたします。」とか「前向きに考慮いたします。」と言うが、英語圏ではせいぜい Let me sleep on it とか Let me think for some time, とか言って、マイナスの本音をプラスのたてまえでごまかすことはしない。

## IV 文化間コミュニケーションの理論的基盤の構築に向けて

対人関係の各文化における基本的な枠組みをつくることを目標とする。

### 4.1. 会話分析（エスノメソドロジー）の限界

会話分析（エスノメソドロジー）はもともと Harvey Sacks を中心とした社会学者たちが開発したものであり、英語の会話にみられる表面的な現象に知らず知らずのうちに注目している可能性が高いといえる。英語では対話が基本であり、日本語では共話が中心であるという水谷信子氏の言うような表面を掘り下げたような対照的な原則が出てこない、会話分析では2人の対話者の発言が重なる時間を0.1秒といった具合にはかるという経験的なデータ

を重視し、対話者は発言が重なるということを毛嫌いする傾向があることを引き出しているが、これはあくまでも表面的な現象であり、その根本にある原則までは探り出さない。会話分析は確かに表面的な現象をあぶりだすのに長けている方法論であるが、惜しむらくはあぶりだされた諸現象の裏にあるより深い原則を追求していないのである。後で見るように共話と対話の差は英語と日本語における注意配分の違いから出ているとみることができる。

会話分析で用いられるもう一つの注目すべき現象として隣接対の概念がある。質問に対する回答、依頼に対する承諾/断り、謝罪に対する受け入れなどのように対話においてついでになることがよくみられるという現象である。これ自体は文を超えた一般化として注目に値する会話分析の貢献であるが、残念ながら日本語では英語と比べると働きかけに対する反応をすることに關してそれほど義務的ではないという違いがある。日本語の会話においてはなんら働きかけに対する反応を発言しないことがよくある。たとえば腹が立っている場合には日本語では無視することがよくおこる。しかし英語では返事が義務的であり、いくら頭に来ていても何らかの返事をする。その例として映画のシナリオからあげてみる。

映画 *When Harry Met Sally*… 失恋という共通の経験を通じて友人関係を気づいた Harry と Sally とふとしたきっかけでベッドを共にした後きまづなつてしばらく会わなかったが共通の友人の結婚式で出席し、再会した場面である。

(1) HARRY Hi.

SALLY Hello.

ここで Harry の親しみを込めた Hi という挨拶に対して、Sally の方は距離を置く Hello を発している。お互いに挨拶をするという行為も隣接対とみなすことができる。

(2) HARRY Nice ceremony.

SALLY Beautiful.

無難な結婚式に対する感想を糸口にしようとして Harry は nice ceremony

というが、nice の程度を高める beautiful でその点では意見が一致している  
とだけしか言わない。会話を盛り上げるためには特に結婚式のどの面がとい  
うことなどに触れ、話が続くようにもってくるはずである。そこで Harry  
は違う話題に移って年末は忙しくて大変だという話に持っていく。

(3) HARRY Boy, the holidays are rough. Every year I just try to get from  
the day before Thanksgiving to the day after New Year's.

SALLY A lot of suicides.

ところが Sally は予測に反したとんでもない返事をするのである。これはあ  
なたとは話したくないという態度を示したものと言える。Harry の 2 度にわ  
たる対話の試みを拒むのに話が進まない返答をしているのである。日本語で  
はこのような場面では返事を全くしないという反応が普通であろう。この例  
では必ず反応を発言して隣接対を完成しなければならないという制約が強い  
ことがわかる。

日本語ではこのような状況では初めのあいさつの段階から返事をしないと  
いうこともありうる。日本語では怒っている程度によってどの段階で無視し  
始めるかを変えることができるが、英語では話を盛り下げるという形しか取  
れず、少なくとも何らかの反応を示さなければならないのである。

次の例はその場ではうやむやな返事でごまかした場合である。後になって  
どさくさに紛れてでもちゃんとした返事をしなければならないという義務  
感を示すものである。この例はイギリス人男性 Charles とアメリカ人女性  
Carrie の対話である。話の成り行きで Carrie が豊富な男性経験を列挙する  
流れになった後での場面である。

(4) 映画 *Four Weddings and a Funeral*

CARRIE: So there you go – less than Madonna, more than Princess Di – I  
hope. And how about you – how many have you slept with?

ひとしきり自分の豊富な性体験を列挙した後、まとめたところで相手の  
Charles に話を振って性体験をずばりと聞いたのである。言ってみれば自分  
の方があらわに性体験を挙げたので、当然同じことを Charles にも要求した

のである。

(5) CHARLES: Christ, nothing like that many. Ahm, I don't know what the fuck I've been doing with my time actually. Work probably – that's it. Work. Work. I have been working late, a lot.

…

Charles はとてもそんな数の経験はないので、とてもちゃんと答えず、仕事で忙しかったんだとごまかしてしまったのである。そのあと一旦別れた後、弟が待っている劇場に行ったのであるが、この機会に告白しないと Carrie とほかの男と結婚式まであわないので、手遅れになってしまうというので、あわてて Carrie の後を追いかけて声をかけ、告白しようと試みるのである。

(6) CHARLES: Sorry. Sorry. I just – this is a really stupid question – particularly in view of our recent shopping excursion – but I just wondered if by any chance – I mean, obviously not, because I am just some git who's really slept with (confessing) nine people, but I just wondered – I really feel… ahm… In short, to recap in a slightly clearer version – in the words of David Cassidy, in fact, while he was still with the Partridge Family – 'I think I love you', and I just wondered whether by any chance you wouldn't like to …no, no, of course not – I'm an idiot, he's not. Excellent. Excellent. Lovely to see you. Sorry to disturb – better get on.

中々勇気を出せず、躓きながらとうとうはっきりは告白できないざまになってしまうのであるが、途中で下線部のように9人としか性経験がないことを認めている。これによって質問に対してはごまかさずちゃんと答えなければならないという気持ちが後々まで持ちこされるということが観察される。

この2つの例によって日本語と比べて英語では隣接対を形成するという制限が強いということがわかる。言語差の裏には注意の配分が言語によって異なっていることを見ることとする。



#### 4.2. 注意

発達心理学では3項関係という概念が重視される。生後5～6カ月になると、赤ちゃんの関心は徐々に外に向けられる。ただ自分と母親、自分とモノとの関係付けはどちらか1つしかできない。9～10ヶ月くらいになると注意の配分ができるようになり、同時に自分とモノ、ヒトとの関係を維持できるようになる。これを3項関係の確立という。指差しによって典型的に表れる。これは「主体（幼児）が物を他者に伝える関係」である。3項関係の確立がコミュニケーションの基盤として働く。ただしホケットの提唱する人間言語の重要なデザイン特徴として「非その場性」(displacement)という特性がある。その場にはないものについても話すことが可能になっていくので、その場にはないものをも3項関係に入ることができるようになる。

最近では共同注意（他者の注意の所在を理解し、その対象に対する他者の態度を共有することや、自分の注意の所在を他者に理解させその対象に対する自分の態度を他者に共有してもらう行動）という名前ではばれ共有という面が強調されるようになっているが、基本的に同じことを指している。その裏にはミラーニューロンが大きな役割を果たしている。また「こころの理論」という形で呼ばれる諸現象も背後にこのとらえ方が控えているといえる。自己の知識と他人の知識が区別できるようになり、言語における定性(definiteness)の基盤となる。これらのつながりについては別稿で詳しく述べることとする。

本稿では日本語と英語の注意の集中度の違いの証拠を挙げ、そこから日本語と英語の語用論的現象の違いとの相関を探り、コミュニケーション一般の基盤となる共同注意が異文化間で異なる側面があることを示す。表面的な様々な文化間のコミュニケーションの相違の裏に注意の仕方と度合いの違いが根本的な要因として働いていることを結論付ける。

### 4.3. 話し相手に対する注意と話題に対する注意の集中度の違い

#### 4.3.1. ひとりごと

筆者は西光（2010）で日英語のひとりごとの違いを指摘した。基本的に英語は思わず発してしまった感嘆詞まではひとりごととして言うが、日本語ではそのあとに続く意味のある文もひとりごととして言う。

(7) Oh, no.

(8) \*?Oh, no! I spilled the coffee!

英語の母語話者に聞いて回ると、誰もいないところで、(8)を発するのはとてもおかしく感じるという反応が必ずと言っていいほど戻ってくる。(8)はそばにいる人に向かって伝えようとしているのである。

(9) あっ、こぼれちゃった。

これに対して日本語では誰もいない場所で(9)を言っても大丈夫である。このことで英語と比べて日本語では相手や相手が言っていることにそれほど集中していないことがわかる。むしろ周りの様子など幅広く注意を分散させているということがわかる。

(鶴田・ロシター・クルトン 1988)には「視線と相づち」というセクションがある。

(10)「英語人に比べて日本人は相手の目を見るのが少ないと言われる。英語社会では視線を交わすのも重要な意思疎通の手段と考えられている。と言っても、会話の間ずっと相手の目を見ているというわけではない。一般に視線を交わすのは、

- ①話しの途中で相手の反応を求めるとき
- ②自分の話しを終わりにして、相手にボタンタッチすることを表わすとき
- ③相手の話に関心を持って聞いていることを表わすとき

に行われるものと考えられる。したがって、自分が話している間より聞き手でいる間の方が相手の目をよく見ていることになる。そして話し始めるといったん視線を落とし、後は話の途中の確認の必要な要所と、話

の終わりに相手の目を見るというのが一般的な英語人の視線の交わり方のパターンである。」

#### 4.3.2. 日本人は相手を全然見なくても話ができる。

日本語では景色を見ながら、2人とも前を見て話して、お互いを見ないことも可能である。映画『東京物語』において2人の人がお互いを顔を見ないで目の前の海を見て話している場面をアメリカ人の学生が見て思わず笑い出してしまったという報告がある。その裏には英語では相手を見て話すという原則がある。車を運転中でも隣の助手席あるいは極端な場合は後ろの席に座っている話し相手の方に顔を向ける。アメリカのテレビドラマではこのような場面で交通事故を起こすシーンがよく映る。

#### 4.3.3. あいづち

英語と比べると日本語はかなりあいづちが多い。その比率は (Maynard, S. K. 1986) によれば、1対3である。その裏には英語では発話は自動的に聞き手が耳を傾けてくれることが前提となっているのであいづちはあまり必要とされていないと考えられる。それに対して日本語では発話は必ずしも聞き手が耳を傾けているかどうかは保証されていない。したがって聞き手は話し手に耳を傾けていることを示す必要が生じるので、ちゃんと聞いていることを相手に頻繁に知らせる必要がある。

#### 4.3.4. 英語ではその場にいる人は全員対話に参加

このことは英語の会話においてその場にいる人のことを **he, she, they** で指しては失礼であるという形で具現化している。すなわち発言したとたんにその場にいる人は対話に参加していると前提されるのである。

#### 4.4. 「城崎にて」の英訳8種から引き出せること

## (11) 「城崎にて」原文

「蜂は羽目のあわいから摩抜けて出ると、一ト先ず玄関の屋根に下りた。其処で羽根や触角を前足や後足で叮嚀に調べると、少し歩きまわる奴もあるが、直ぐ細長い羽根を両方へしっかりと張ってぶーんと飛び立つ。飛び立つと急に早くなって飛んで行く。植込みの八つ手の花が丁度咲きかけで蜂はそれに群っていた。自分は退屈すると、よく欄干から蜂の出入りを眺めていた。」(下線部西光、以下同様)

## 4.4.1 英語話者による英訳

2つの点で視線の動きについて注目すべき点がある。

第1に原文では少し歩きまわる蜂と直ぐに飛び立つ蜂を均等に描写している。第2に蜂から視線を切った植込みの描写に続けて蜂に視線を戻した視線の動きがみられる。なんらおかしいとは思えない現象であるが、英語話者の英訳5種を見てみると英語ではこの2つの視線の動きに抵抗があることがわかる。

## (12) William F. Sibley

Once they had squeezed themselves out through the cracks between the panels, they would drop down onto the roof of the entranceway. There they would use their front legs to make fine adjustments on wings and antennae; then except for a few that continued to walk about awhile, they would thrust their wings tautly forward and take off with a low buzzing sound. They gathered speed as soon as they were in the air, swarming toward the potted *yatsude* shrubs that had just come into bloom. I idled away much time at the railing of my balcony, entertained by the comings and goings of these bees.

Sibley は第1点については歩き回る蜂を例外として、従属的な表現で述べ、主にすぐに飛び立つ蜂に集中している。

第2点については蜂を追う視線を切らず、行き着いた先に奴手の植え込みがある形になっている。

## (13) Seidensticker

Pushing their way out from between the boards they would pause on the roof of the entranceway. Some would walk around for a moment after they had arranged their wings and feelers with their front and hind legs, and immediately they too would spread their slender wings taut and take off with a heavy droning. Once in the air they moved quickly away. They gathered around the late shrubs in the garden, just then coming into bloom. I would hang over the railing when I was bored and watch them come and go.

Seidensticker は第 1 点については少々複雑である。少数派の歩きまわる蜂に視線を集中し、他にも多数派の歩きまわらない蜂がいることを too という表現で案に匂わしている。しかし多数派の蜂の描写が全くなく、唐突に too だけで匂わすのはいかにも不自然である。第 2 点については Sibley と同じく蜂に視線を維持し行きついた先のヤツデに目を移す形をとっている。

## (14) Mark Petersen

When they had squeezed their way through spaces between the panels, they would pause for a moment on the roof. They would carefully straighten up their wings and feelers with their legs. Some would walk around a bit, as well, but they, too, like the others, would soon stretch their slender wings out tight and take off with a droning noise. Once they were off, they would gain speed rapidly and would quickly have flown out to a great distance. They would also swarm about the shrubbery that was just coming into bloom. When I was feeling bored, I would often hang over the railing, watching the bees come and go.

Petersen は基本的に第 1 点も第 2 点も Seidensticker と同じ作戦をとっている。ただしこし丁寧な描写法をとっている。Too に like the others と書き加えることにより、Seidensticker ほど too が唐突には感じられない。さらに前に as well を入れている。Seidensticker と比べると多数派の蜂に配分する注意量が少し増している。

## (15) Roy Starrs

When the bees slipped out through the gaps between the boards, they would land for a while on the entrance-hall roof. There they would carefully arrange their wings and antennae with their fore- or rear-legs – and some would walk around a little – then they would suddenly stretch both their long thin wings out tight and fly up with a buzz. Once aloft, they would suddenly gain speed and fly quickly off. Some hedge flowers had just begun to bloom and the bees crowded around those. When bored I would often lean over the railing and watch their comings and goings.

Starrs は第 1 点については例外的な歩きまわる蜂を挿入句として付随的な描写を行っている。注意量としては Petersen に近いと言えよう。ところが第 2 点については今までの 3 人と異なり、原文通りにいったん蜂から視線を切り、八つ手の描写が間に割って入っている。

## (16) Dunlop

When they emerged, brushing the sides of the loosely joined planks of the paneling, the wasps would descend to the roof of the entryway for a while. There they would meticulously adjust their wings and antennae with their front and back legs. Then they would walk about a bit. All of a sudden, their slender wings stretched taut to either side, they lifted off with a resonant buzz. When they'd flown up like that, they suddenly shot away into the distance. The flowers of the yatsude being in bloom just then, the wasps clustered about its shrubbery. When I was bored, I would often watch the comings and goings of the wasps from the veranda railing.

Dunlop は 5 人の英語母語話者の内でも極端に直訳に走る傾向のある訳者である。そのような傾向のある Dunlop でも第 1 点はむしろ上の 4 人の訳者より極端な方法を取り、すべての蜂が歩きまわるという描写になっている。これは 2 つのグループの蜂に注意を配分することが難しいのであきらめてしまったものと思われる。Dunlop は 5 人の英語母語話者で直訳調が一番強い訳者

であるので、一旦直訳した後、いくら何でも無理だと感じたのであろう。ということは英語話者にとって第1点は抵抗がかなり強いということを示しているといえる。第2点については Starrs と同様に蜂から視線を切り、八つ手の描写が割って入っている。

今までの英語母語訳者は原文から離れる傾向のある訳者から直訳になる傾向のある訳者の順序に並べてある。

第1点の2つのグループに均等に注意を配分するという原文に対しては原文のままに均等に配分した訳者は存在しなかった。2つのグループに注意をできるだけ配分する度合いで訳者を並べると

Starrs>Sibley>Petersen>Seidensticker>Dunlop

の順になる。

第2点の一連の動きの途中で注意を切っている原文については英語母語訳者は Dunlop, Starrs>Sibley, Petersen, Seidensticker の様に分かれ、第1点ほど抵抗の程度が高くないということがわかる。

#### 4.4.2. 日本人訳者による英訳

それでは日本人訳者がどのような作戦をとるかを見てみよう。

(17) 羽田三郎

Slipping out between the panels, they first got down upon the roof of the porch, where they meticulously straightened their feelers and wings with their legs. Then a few walked around but most of them stretched out their long, narrow wings and took off with a buzz. Once off the roof, they gathered speed and flew away. Of the shrubbery in the garden, yatsude (fatscia japonica) was then flowering and attracted a swarm of bees. Whenever I was bored, I looked at the insects coming and going.

羽田は第1点については原文の通りで、2つのグループに並列接続詞の *but* を用いて、均等に注意を配分している。第2点も八つ手の描写で視線を切っている。羽田は日本人訳者3人の中では一番英語らしい表現法をとる訳者で

あることからして、いかに英語らしさに熟達した日本人でもなかなか注意の配分は手におえないことがわかる。

(18) 佐藤いね子

When they slipped out of the gap between the panels, the bees first lighted on the roof of the porch. There they would carefully arrange their wings and antennae with fore and back feet, then some would walk about, but most of them would fly away with a buzzing sound, their oblong wings firmly stretched on both sides. When they started flying, they suddenly increased their speed, and flew away. The aralia in the shrubbery had just begun to bloom and the bees gathered around it. When I was bored, I often leant on the balustrade and watched the goings and comings of those bees.

佐藤はイギリスで留学中に日本文学の英訳をいくつか行い、イギリス人教師に添削してもらったのであるが、あえて直されなかったことから、注意の配分はかなり微妙な問題であることがわかる。

(19) 福田つとむ

When they came out from the interstices of the wainscots, they rested their wings, for a while, on the roof. There they examined carefully their wings and antennae with fore and hind legs. When they had finished it, some of them would walk about for some time, but most of them would buzz away, spreading out their wings, their flying speed increased suddenly. They flew to the *Fatsia japonica* which now began to bloom beautifully. When I got tired, I used to look at their movements.

福田は第1点については並列接続詞の *but* を用い、2つのグループに均等な描写を行っているが、第2点については逆に英語らしく視線を切っていない。これは英語母語訳者の *Starrs* と *Dunlop* と逆の傾向であるので、福田が英語らしい注意の配分を理解していたというよりはたまたま思いついた表現法を用いただけのことであろう。



#### 4.4.3. 日本語と英語の注意方策の違い

以上の結果をまとめておく。

##### (20) 英語と日本語における注意の集中度の違い

英語 > 日本語

派生原則

- ① 英語ではひとまとまりのものに集中し、その他のものには一瞥しかできない。(かなり強い制約) 日本語では同時に2つのものに注目することができる。
- ② 速い展開の出来事において、英語では最後まで図的 (figure) なものを見届ける傾向がある。(やや強い制約) 日本語では途中までは見ているが、最後の確認の前に周りに注意を払うことがある。

3項関係がコミュニケーションの基盤であるという本稿の趣旨からすると話し相手に対する注意と話題となっている事物に対する注意が配分されるので、この一般化は話し相手に対する注意で費やすことで残った注意量の配分の日本語と英語の事物に対する配分の違いを示しているということになる。

#### 4.4.4. 注意の心理学の知見

同時に複数の情報に注意を配分することを分割注意 (divided attention) という。2つの課題を実験参加者に同時に遂行させる実験方法を二重課題 (dual task) という。聞き取ることと行動のように異なる知覚を用いる二重課題では干渉はあまり起こらないが、2つのメッセージを聞き取る場合のように同じ知覚を用いる二重課題ではかなり強い干渉が起こることが様々な実験で示されている。

前節における「城崎にて」の英訳に関する注意の配分は厳密には二重課題ではない。第1点は交互に2つの集合体を見るのであって、同時ではない。また第2点はある集団の動きの展開を追う途中で視線を切るか、あるいは最後まで追うかの違いである。二重課題の方がかなりの注意の集中に障害を起

こすと考えられる。第1点と第2点はいったん注意を集中した対象から目を離すことができるかどうかの問題である。とはいえ二重課題と「城崎にて」における注意の配分には基本的に同じ要因が働いているとみなすことができる。

二重課題に対する心理学実験による研究としては Kopecky (2008) がある。Kopecky は日本の大学生とアメリカの大学生に二重課題の実験を行い、日本人学生の方がアメリカ人学生よりも少し二重課題を行うことができるという結果を出している。この実験結果の裏には日本人はアメリカ人と比べて注意の集中度が低いということがありと仮定するとつじつまが合う。継時的な「城崎にて」における第1点と第2点において第2点は英語母語話者でも難しくても何とかこなすことができるが、第1点は英語母語話者には克服するのが難しいということをデータが示しているといえる。二重課題は同時に2つの課題を行うので、継時的に2つのことを行うのよりさらに困難であるということが容易に推察される。願わくば、心理学者による「城崎にて」の2つの現象に対応する実験を日本人と英語母語話者を対象として行って実証されることを願う。

## V 結語

本稿では現在標準的な語用論のモデルとして一般に受け入れられている語用論のモデルは言語普遍としてとらえられているが、実はヨーロッパ言語にみられることが多く、異文化間コミュニケーションの理論的基盤として用いるには不十分であることを特にグライス理論の質の格率が必ずしも成立しないことから、対人関係の文化差を考慮に入れたモデルを確立する必要性を示した。

第2に表面的な語用論的な現象の裏には人間の基本的な認知機能としての注意の配分に基づく3項関係の成立と「城崎にて」の英訳8種によるデータから日本語と英語における注意の配分の違いが裏に存在することを提案した。

(筆者は神戸大学大学院人文学研究科名誉教授)

## 参考文献

- De Mente, Boye Lafayette (1994) *NTC's Dictionary of Japan's Cultural Code Words*. Lincolnwood: National Textbook Company.
- Jain, Nemi C. (1992) "Teaching about culture and communicative life in India," Paper presented at the Annual Convention of Western States Communication Association. Boise, Idaho, Feb. 21-25, 1992
- Kopecky, Jonathan Joseph (2008) *Strategic Individual Differences in High-Speed Human Performance*. Ph. D. Dissertation, University of Michigan/
- Maynard, S. K. (1986) "On back-channel behavior in Japanese and English casual conversation." *Linguistics* 24, 1079-108.
- 西光義弘 (2010) 「ひとりごとの言語学」くろしお言語大学塾 ([www.gengoj.com/seminar](http://www.gengoj.com/seminar))
- 野田尚史 (2003) 「知らなくても道を教えるコミュニケーション」東北大学文学部国語学研究室内『いがぐり』編集部
- Storti, Craig (2007) *Speaking of India: Bridging the Communication Gap When Working with Indians* Boston: Intercultural Press
- 鶴田庸子/ポール・ロシター/ティム・クルトン (1988) 『英語のソーシャルスキル』大修館書店
- Valentine, Tamara (1994) "When "No" means "Yes": agreeing and disagreeing in Indian English discourse. Paper presented at the International Conference on World Englishes Today (Urbana, IL, March 31-April 2, 1994)